



※「みんなの夢アワード2010」のイベント当日に使用する電力1,000kWhは、太陽光発電のグリーン電力でまかっています。※この印刷物には、高度環境配慮型の「南アルプス紙」を使用しています。



MINNA NO YUME AWARD



みんなの夢

アワード 2010

12.21 日比谷公会堂

edited by eooooo

みんなの夢アワード

「みんなの夢アワード」は、みんなが夢をもちたくなるステキな夢に贈られるアワードです。アワード会期中にエントリーされた209の夢のなかから選ばれた5つの夢を、その夢を持つ5名自らが発表。その中から、最もみんなをワクワクさせ、世界を幸せにする夢を「みんなの夢アワード 2010」として選出します。



supported by



in association with



主催：NPO 法人みんなの夢をかなえる会
 共催：みんなの夢オフィス株式会社
 後援：東京都（予定） J-WAVE
 協力：日本経済新聞社クロスメディア営業局 日経ビジネスアソシエ ecocolor (エココロ)

このアワードでは、“夢を語る”ことの大切さについてみんなと考えます。

夢は自分ひとりではかなえることはできません。

夢を語ることで、仲間やまわりの人の共感や共鳴を生み、実現へと近づいていくのです。

だから夢は大きな声でどンドン語ったほうがいいのです。

社会を変える皆さんの夢、

たくさんのエントリーを待っています！

NPO 法人 みんなの夢をかなえる会 理事長

渡邊美樹



みんなの夢アワード 2010

最終選考委員

渡邊美樹 (NPO 法人みんなの夢をかなえる会 理事長)
 桑原 豊 (ワタミ株式会社 代表取締役社長 COO)
 小松成美 (ノンフィクション作家)
 澤上篤人 (さわかみ投資株式会社 代表取締役)
 白石真澄 (関西大学 政策創造学部教授)

総合プロデューサー

中川直洋 (NPO 法人みんなの夢をかなえる会)

制作統括

中島 悠 (グリーンアップル)
 事務局長 青木茂雄 (NPO 法人みんなの夢をかなえる会)
 事務局 柿原優紀 (みんなの夢アワード 2010 事務局)

平尾久美子 (みんなの夢アワード 2010 事務局)
 中村 優 (みんなの夢アワード 2010 事務局)
 太幡竜一 (NPO 法人みんなの夢をかなえる会)
 藤本恵子 (NPO 法人みんなの夢をかなえる会)
 桑名朋子 (みんなの夢オフィス株式会社)

ステージ演出

古谷英治 (エイジ庵株式会社)
 ステージ制作 池谷健太郎 (株式会社アイモ)

総務

丹羽順子 (J-WAVE ナビゲーター)

広告制作

加藤久美子 (株式会社アールケーシー)

パンフレット制作

佐藤 啓 (株式会社エスプレ)
 青木宏之 (Mag)
 関根亜希子 (Mag)

パンフレット印刷

大川哲郎 (株式会社大川印刷)
 中橋俊洋 (株式会社大川印刷)

WEB サイト制作

柳澤大輔 (面白法人カヤック)
 綿引啓太 (面白法人カヤック)

NPO 法人 みんなの夢をかなえる会

理事長 渡邊美樹
 専務理事 中川直洋
 理事 川上和久 (明治学院大学 副学長) 平林良仁 (キャピタル・アドバイザー株式会社 代表取締役会長) 藤野英人 (レオス・キャピタルワークス株式会社 取締役) 桑原 豊 (ワタミ株式会社 代表取締役社長 COO)

呼びかけ人

秋山をね (株式会社インテグレックス 代表取締役社長) 有森裕子 (パルセロナ・アトランタオリンピック大会 女子マラソンメダリスト) 安藤国威 (ソニー生命保険株式会社 取締役会長)
 泉谷直木 (アサヒビール株式会社 代表取締役社長) 福本健一 (株式会社ゼットン 代表取締役社長) 牛嶋浩美 (イラストレーター) 大久保秀夫 (株式会社フォーバル 代表取締役会長兼社長)
 大嶋啓介 (有限会社てっぺん 代表取締役) 奥 正之 (株式会社三井住友銀行 頭取) 鏡治舎巧 (ナノソニック株式会社 常務役員) 神谷利徳 (株式会社神谷デザイン事務所 代表取締役) 桑田真澄 (元プロ野球選手)
 黒川 清 (政策研究大学院大学教授 / 内閣特別顧問 / 特定非営利活動法人日本医療政策機構 代表理事) 小松成美 (ノンフィクション作家) 佐治信忠 (サントリーホールディングス株式会社 代表取締役社長)
 澤上篤人 (さわかみ投資株式会社 代表取締役) 志の輔 (落語家) 清水園明 (タレント) 白石真澄 (関西大学 政策創造学部教授) 宋 文洲 (経営コンサルタント / 経済評論家)
 孫 正義 (ソフトバンク株式会社 代表取締役社長) 宝田 明 (俳優) 武田双雲 (書道家) 為末 大 (プロ陸上選手) 張 富士夫 (トヨタ自動車株式会社 代表取締役会長)
 経沢香保子 (トレンダス株式会社 代表取締役) テラウチマサト (写真家) テリー伊藤 (演出家) 徳光和夫 (フリーアナウンサー / タレント / 司会者) 鳥羽博道 (株式会社ドールコーヒー 名誉会長)
 鳥井親一 (三陽物産株式会社 代表取締役社長) Kage (カリカチュア・ジャパン株式会社 代表取締役社長 兼 代表アーティスト) 長倉牧子 (株式会社 FM BIRD 代表取締役社長) 野口 健 (アルビニスト)
 橋本雅治 (株式会社アイデアインターナショナル 代表取締役) hitomi (アーティスト) 弘兼憲史 (漫画家) 堀口マモル (フォトグラファー) 前川真悟 (かりゆし58 ヴォーカル / ベース)
 皆木和義 (NPO 法人認定拠出型年金教育・普及協会 理事長) 宮森宏和 (株式会社ゴーゴーシステム 代表取締役) 吉越浩一郎 (元トリンプ・インターナショナル・ジャパン株式会社 代表取締役社長)
 米倉誠一郎 (一橋大学イノベーション研究センター教授) 分林保弘 (株式会社日本M&Aセンター 代表取締役会長) 和田 孝 (テルモ株式会社 代表取締役会長) 渡邊智恵子 (株式会社パランティア 代表取締役)

運営委員

佐藤 啓 (株式会社エスプレ) 鈴木菜央 (株式会社ビオピオ) 関根健二 (株式会社ユナイテッドピープル) 中島 悠 (グリーンアップル) 平世将夫 (株式会社レイディーバグ) 柳澤大輔 (面白法人カヤック)

<p>program</p>	16:00	開場		17:35	プレゼンテーション
	17:00	オープニング		#1 「親孝行に一生をかける人」マサキ #2 「世界を一つに繋ぐ人」野口亮太 #3 「伝説のホテル」鶴岡秀子 #4 「観る人に夢を与える“夢マジシャン”」ナカノ・マクレーン #5 「アジア最貧国ドラゴン桜」税所篤快	
	17:05	トーク：渡邊美樹			
	17:20	トークセッション：テリー伊藤＋渡邊美樹		19:10	審査結果発表

01

entry number 002



親孝行に一生かける人 マサキさん

まさき / 小学校から大学の進路講演、企業研修を行うGlobe代表。学生時代、日本一周と世界50ヶ国の旅に出る。帰国後、2年のサラリーマン生活の後に起業。また、[MY EARTH] 代表として埼玉で農業＆田舎体験ツアーを行い、[NPO法人「超」大学]学長として今年カンボジア進出を計画中。

夢を通じてしたいこと
自分の大切な人を大切にできる世界をつくる!
<http://ameblo.jp/globecorp/>

100人分の親孝行を仕掛ける!

茶髪のロン毛にニット帽。やって来たマサキさんの姿は、「親孝行に一生をかける人」という夢の肩書きと「現在の職業：企業研修や学生向けの講演」というプロフィールから私たちが勝手に描いたイメージを大きく覆すものでした。しかし、夢を語りだした彼の口から出て来るのは、「もっとありがとうって言いたい」「本気で親孝行したい」「尊敬しているのは母」というまっすぐなもののほかり。そのギャップに戸惑う私たちをよそに、楽しそうに話す彼が何度も口にしたのが、「ありがとう」と「親孝行」の言葉でした。そんな彼が、今、取り組んでいるのが、「産んでくれてありがとう」という感謝の気持ちを両親に伝えるための舞台「さんくす・すてーじ」だと言います。今年9月に実現させて大阪でのステージには100人が参加し、観客として招待した両親や家族に向けて「ありがとう」の気持ちを伝えたのだそう。

—「親孝行しようよ!」って言うの、ちょっと照れくさくないですか?

照れくさいですね、普通。照れくさいから言わないじゃないですか? 本当は感謝しても、照れくさく言えない。そ

ういう人の方が多いですよ、きっと。だからこそ、それができる世界だったらいいなって思うんですよ。

—マサキさん自身は親孝行、してるんですか?

してますよ。今年の母親の誕生日には、兄と妹と一緒に、「オカンを一日でセブにしちゃおうツアー」っていうのをサプライズで決行したんですよ。母をエステに連れてって、美容室でネイルとヘアカットもさせてあげて、写真館で家族写真撮って、その後、みんなでいつもより贅沢なところで食事したんですよ。もう、周りの人がうらやむくらいに楽しんで親孝行してましたよ。

—楽しそうですね。マサキさん自身が「親孝行しよう」って思ったきっかけは、何だったんですか?

ひとり暮らしを始めたことですね。ひとりになってみて、「ただいま」って言うても「おかえり」がないとか、そんな些細なことですけど、「あ、今まで普通にあったものは、オカンがいたからあったんやな」って気づいたんです。うちは母子家庭だったので、余計に。それでたとえば、母親は僕を育てるためにどれほどのことを犠牲にしたらどうか考えると、僕ひとりいなかったら、その分、母ができたことってたくさん

あると思うんですよ。もっと旅行とか行けたらどうとか、もっと贅沢できたろうとかね。それなのに、僕は母に感謝の気持ちを伝えたことがなかったんですよ。それで、感謝してるなら伝えなきゃ。でもまあ、突然ある日から母親に毎日メール、毎日電話ってできないじゃないですか。だから、最初は何かの日に手紙を書いてプレゼントしたりしましたね。それで、そういうことが照れくさくてできないと言う人にも、親孝行の機会があったらいいなって思ったんです。

—その機会が、「さんくす・すてーじ」?

そうですね。「さんくす・すてーじ」は、僕が企画したミュージカルの舞台なんですけど、参加者が母親を招待して、「産んでくれてありがとう」という感謝の気持ちを伝えるんです。そんなこと言ったことないという参加者がほとんどなんですけどね。

—今まで言ったことないなら、なかなか言えないのでは?

だから、ミュージカルなんですよ。そんな照れくさいこと面と向かっては言えないと言うのなら、面と向かって言うのではなく、演じるなかで言ってしまう方がいいじゃないかっていうことなんです。舞台上立って、役を演じながら「産んでく

れてありがとう」という台詞を言えばいい。それだったら言えようじゃないか? たとえ台詞でも、客席にいる大切な人には絶対伝わりますから。演じるのは大丈夫、みんなできるはず。だって、子どものころ、みんな自然にままごとかしてたでしょ? お母さんになったことないのに、お母さんの役とかできてたじゃないですか。人にはきっと、もともと演じる能力が備わっているんですよ。

—ステージには、どんな人が参加しているんですか?

希望する人ならだれでも参加可能で、年齢も性別も、職業も限定せずに募集しているの、本当に色んな人が集まっています。学生も社会人もいて、サークルの仲間同士で来てくれる人たちもいますね。音楽やダンスのプロを募集しているわけではないので、特技なんてなくてもいいんです。そもそも演じるプロなんかじゃない僕が台本を書いているわけですし。「おもしろそう」と言ってやって来る人や、「こんな機会ですか、「産んでくれてありがとう」って言えないから」と言ってやって来る人などさまざまですが、今年のステージでは、参加者の多くが生まれて初めて「産んでくれてありがとう」って言うことができました。

—このステージを通じて、マサキさんがしようとしている

こととは何なのでしょう?

別に僕は、「これをやるべきだ」と言いたいことはないんです。ただ、きっかけがない人にはステージに参加して欲しいし、僕自身が楽しんでやっていくことで、親孝行ってこんなに楽しいよっていう姿を見せていけたらと思っています。そういうことから、いつか「大切な人を大切にできる世界」ができればと思っています。一番身近な人に感謝ができれば、きっと周りの誰にでも感謝の気持ちを表すことができると思うから。

—このステージは、どこまで広がって行くのですか?

ステージは世界中でやっていきたいと思っています。そして、実は、このステージを行った9月30日は、僕が日本記念日協会に「両親の日」として申請して登録されているのですが、これを世界共通のお祭りの日にしたいんです。「ワールドピース祭り」っていう。これは、大きな夢ですよ!

来年は、4都市でのステージ講演を計画しているというマサキさん。12月21日、日比谷公会堂では、その先にある「ワールドピース祭り」実現に向けてのさらに大きな夢を語ります。

02

entry number 082



世界中を一つに繋ぐつなぎ人 野口亮太さん

のぐち・りょうた / 高校中退後ミュージシャンを志す。父親が不治の病にかかり、そして死に直面する。そのことで、自分の人生の意味を問いたす。死んでもなお後世に残るものを遺りたいという想いから、人と人をつなげる悩み相談リレーを思いつき、行動を開始。今までの様々なバイトの経験からサイト運営をひとりで行う。ひとつの小さなアイデアが世界を変えるという信念の元、邁進中。

夢を通じてしたいこと
悩み相談のリレーを世界中につないでいくことで、今よりもっと笑顔が溢れる世の中にする
<http://hitotsuna.com/>

人と人を繋いで、想いを紡ぐ!

会ったこともない誰かが問いかける「悩み」に、見ず知らずの人が答える。そして、今度は答えた人が自分自身の悩みを次に登場するであろう誰かに向かって問いかける。そんな「お悩み相談リレー」を展開する「ひとつな」<http://hitotsuna.com/> というウェブサイトがあります。このサイトを作っているのが、野口亮太さんです。どんなふうにこのサイトが出来上がったのかが気になって、その質問を興味のままに投げかけると、返ってきたのは「サイトをおもしろくするのは、出てくれる人たちのアイデアですから」と、さらりとした答えでした。重ねて、「みんなの夢アワードに応募したきっかけは?」とたずねてみても、「おもしろいと思ってくれる人がいっぱいいるなと思って」と、こちらが拍子抜けしてしまうほどに彼の言葉は自然体そのもの。しかし、ゆっくりと丁寧に冷静に話す彼の言葉のなかに感じるのは、「人」に対する温かさでした。

—「ひとつな」を見せて頂きました。すてきなサイトですね。写真はどなたが撮っているんですか?

ほとんど僕ですよ。

—答えてくれる人を探したり、質問をしに行ったりするのは? サイトの更新などは?

僕しかないの、それも僕がやっているんです。路上に出て、「お悩み相談リレー」というのをやっているのですが、やってみませんか? って声をかけて黒板に回答を書いてもらって写真を撮り、サイトにアップするんです。

—ひとりでサイトを運営しているということですか?

そうですね。普段は、仕事の合間にやっています。でも、最近では、地方から参加したいと言って、写真を

撮って送ってくれる人も出てきたんです。そうやって一緒にやってくれる人が増えていったらいいな、と思っています。僕ひとりでやっても時間も行動も限られているし、遠くの人とリアルタイムで繋がっていくのは難しい。でも、たくさんの方がいれば、実現できると思うんです。自分は場を提供しているだけで、そこでどう楽しむのかはその人次第。

—路上で声をかけた人がみんな答えてくださるわけじゃないですよね、きっと。

答えてもらえないこともありますね。でも、答えてはくれなかった人も、僕が別の人に声をかけるきっかけをくれるという意味では、繋いでくれる事になるので、それもまた繋がりがなんだと考えています。楽しいんですよ、肩書きや年齢といったあらゆるものを飛び越えたものを作っているという楽しさがある。どんな人でも、人と繋がっているということを伝えられる可能性にワクワクするんです。

—そもそも、一番最初はどんな思いでこのサイトを作ったのですか?

強いメッセージを持って作ったわけではないじゃないですか。「こういうのがあったら楽しいんじゃないかな」って思ったので作ってみて、僕自身が最初の相談者として登場したんです。「明日の朝食、ご飯とパンどちらがいいですか?」っていう、どうってことない相談です(笑)。そしたら、答えてくれる人がいた。そこからずっとこのリレーが繋がっているんです。僕自身が楽しみながらやっていますね。これを広げていきたいと思っていて、今は47都道府県の全てから参加者が出たらしいなと思ってマッピングしたりしてます。でも、それを達成したからと言って、世界平和につながるものではないじゃないですか? それに、「悩み相談」って検索してこのサイトに飛んで来てくれる人が多いのですが、多分、95%は解決してないんじゃないかな?

—悩みを解決しないお悩み相談サイトの意味って?

「ひとつな」を通じて受け取るのはきっと、「なんか元気でた!」、みたいなことだと思うんですよ。悩みは解決してないけど、なんとなく元気がでて、またがんばれるっていうね。感じ方は人それぞれで、僕が「こういうふうに感じてもらおう」と仕掛けているわけでもない。僕はただ、色んな世代の人、色んな国の人に見てくれて参加してくれる、そんな未来を夢見しています。人と人の繋がりを忘れてきている人たちが、繋がりを再確認したり、何かを見つけたら、そういうことが起こればいいなって。そういうことが起こったら、変わって来ることがあると思うんです。

お話のなかで、野口さんは「ひとつな」を「地球というフィールドを使っちゃったゲーム」と言っていました。人と人を繋いでいくことを本当に楽しんでいる様子。このリレーが世界に繋がっていった時、世界にはどんな「つながり」ができるのでしょうか? 12月21日の野口さんのプレゼンをお楽しみに。

03

entry
number
205【伝説のホテル】代表取締役
鶴岡 秀子 さん

つるかひでこ/大学卒業後、大手流通業に入社し店勤務を始める。ひとりで20人分の売上を達成した実力が認められ、同社の経営企画・人事企画に異動。その後、外資系大手コンサルティングファームで、外資系製菓企業・アミューズメントパーク、大手メーカーなどに経営戦略及びヒューマンリソース、ナレッジマネジメントなどのコンサルティングを行う。2000年に株式会社サイバーブレインズ(現・楽天リサーチ)を立ち上げ、営業・提携・PR・広報をメインに活動を行う。コンサルティング会社経営を経て、2006年3月から念願のホテル経営に取り組み。

夢を通じてしたいこと

【伝説のホテル】を通じ、人が自分自身の素晴らしさに気づき、本当の幸せを見つけたためのお手伝いをする

http://legendhotels.jp/

誰も見たことのない「伝説のホテル」を創る！

「伝説のホテル」(※リンク <http://legendhotels.jp/dream/>)。夢の肩書きに書かれたその不思議なホテルの名前が気になっていた人も多いのではないのでしょうか？ その肩書きを書いた鶴岡さんにお会いしてきました。鶴岡さんが都内に構える事務所におじゃました私たちが驚かされたのは、すでに着工を目前に控えているという「伝説のホテル」のイメージ図や設計図の数々。さらには、本棚に並ぶご本人が書かれた何冊もの著書でした。実は彼女には、「未来の名刺」には書かれなかった立派なキャリアがありました。これまで掲げたたかさんの目標を確実に実現してきた彼女が今回掲げたのが、この不思議な名前のホテルを通じた大きな夢なのだと言います。

—まず、鶴岡さんのキャリアについて聞かせていただけますか？

私は10歳の頃から起業することを夢にしていました。

大学卒業後に就職したのは、アパレルの会社でした。入社後すぐに店舗勤務になったのですが、そこではひとりで20人分の売上げを出しましたね。人と話すのが好きでし、そもそも「お客様と直接接する技術」を学ぼうと入社したので、お客様に喜んで頂きたいという一心でお店に立っていた結果だと思えます。その後は、企業のコンサルをやったり、仲間と会社を立ち上げてビジネスをしたりしました。そういった仕事を楽しむノウハウをまとめた本が国内外で出版されています。

—今まで掲げてきた目標は実際に達成されてきたんですね。そんな鶴岡さんが今度はホテルを？なぜ？

ある時、「本当にやりたいことにチャレンジできるとしたら、何をしたいだろう？」と自分自身に問いかけたんです。その答えがホテルだったのです。ホテル経営というビジネスはとても難しそうだったから。だから、前々からやってみたくて思っていたんです。ホテルには衣食住のすべてがあって、サービスだっていつも一流のものが

求められる。チャレンジしがいのあるビジネスだと思いませんか？

—難しそうだと、踏み出すことに躊躇してしまう人が多いと思うのですが、鶴岡さんは難しそうに見えるほど燃えるんですか？

そうですね。達成までのステップが見えていることへのチャレンジは、本当の「チャレンジ」だとは思えないんです。それを実現するために時間を費やすというだけのこと。先がすべては見えず、一歩進むと、その先が見えて来る、それがチャレンジだと思っています。それに、私が作りたかったのは今まで誰も作ったことのない「伝説のホテル」。誰も作ったことがない、誰にもわからないものだからこそ、やり遂げた時にとんでもないものができあがるんだと、そう考えたら、ワクワクするんですよ。

—それで、「伝説のホテル」って一体どんなホテルなんですか？

伝説のホテルは、「泊まることで世界のためになるホテル」です。ホテル自体は、募集により決定するオーナーの資金によって建てられ、私たちがオーナーの建物を借り受けて運営する形です。オーナーもゲストも、このホテルを通じて世界のためにアクションを起こせるという仕組みになっています。「未来の名刺」にも書きましたが、このホテルには、「オーナーハーフ募金」や「メンバーハーフ募金」、「100個の憧れ」、「W購入」などの仕組みがあります。そういった仕組みによってこのホテルに関わる誰もが、いくつものNPOを通じて世界中の問題を解決するための活動を支援し、このホテルには来られない人々を応援することができるんです。

—ホテル開業というのは、壮大な計画ですが、鶴岡さんはホテルを経営したことはないんですよね？

そうです。私はホテルで働いたことすらないんです。それでもすでにこの計画や私が本当に実現したいと思っていることをたかさんの人にお伝えしてきたことで「一

04

entry
number
141世界一夢を与えるマジシャン
ナカノ・マクレーンさん

なかのまくれーん/21歳にして都内を中心に活動する若手マジシャン。学生時代からマジシャンとしての活動を始め、夢を実現するために上京。現在は、ホテルや会員制バーと契約し定期的にマジックショーを行うかたわら、初心者でも参加できるマジック教室も行っている。

夢を通じてしたいこと

日本初のマジシャン専門学校の設立。
世界一夢を与えるマジシャンとして世界的に活動。

http://www.nakanomaclaaine.com/

観る人に夢を与える「夢マジシャン」！

マクレーンさんがひと言ずつに添えるジェスチャー。その動きのひとつずつがともしなやかで、「さすが、マジシャン。」と妙な納得をしながら、夢を語るその姿に入ってしまう。21歳にして大手ホテルのステージにひとりで立、ちマジックショーを行っているというつ彼が掲げた夢の肩書きは、「世界一夢を与えるマジシャン」。人懐っこい笑顔が話しながらも、ところどころで「僕のマジックは、観る人に夢を与えることができる」という自信をのぞかせます。人を惹き付ける彼のマジックは、どこへ向かっているのでしょうか？

—マジックを始めたきっかけは？

マジックを始めたのは、10歳の頃。父親がおもちゃの道具を使ったマジックを見せてくれて、すごく感動したんです。そのマジックに憧れて、そのマジック道具でいつも練習していました。でも、年齢を重ねるうちに、それとは別に「将来は国家公務員になるんだ」と思うようになっていました。僕は石川県出身なのですが、地元ではまだまだ「公務員神話」みたいなものがあるって、安定した地位と高い給料が得

られる公務員になるのが何よりも立派なことという意識を持つ人が多いんです。僕にも、漠然とですがその意識があったのでしょうか。

—それなのにどんなきっかけで、改めてマジシャンになろうと思ったのですか？

ある時、知り合った僕よりずっと歳上の方に「君は、何のために生きているの？」と問われたことがあったんです。漠然と公務員になろうと思っていた時ですから、答えられず、頭のなかが疑問だらけになりましたね。これから何のために生きて、何のためにどんな仕事をしたいのか……って。それで、よくよく考えてみたら、僕が一番やりたいことは小さい頃からずっと、「マジックで人を喜ばせる」ということだって気付いたんです。それまでは何かやりたいと思うことがあっても、周りの評価が気になって踏み切れないタイプだったのですが、もう、いっせそういうタガすはずしてしまいたい、という気持ちになりました。それで、プロのマジシャンになろうという決断をしたんです。まあ、業の定、周囲からも反対されたんですけどね。

—プロのマジシャンになるために、何から始めたんですか？

実は、マジシャンって正式には「プロ」というのが存在しないんですよ。資格なんかがあるわけじゃないですから。それで僕は、ボランティアでマジックショーを始めたんです。地元の介護施設や養護施設、病院など、マジックをさせてくれるところを見つけては行って、年間50か所以上の場所でマジックショーをしました。そこで、僕自身が気づかされたこともたくさんありました。

—気づかされたのは、どんなことですか？

マジックには、人を元気にするパワーがあるんだってことです。ある時、介護施設でマジックをしたんです。介護施設ですから、高齢で認知症の方もたくさんいたんですね。でも、僕がマジックをすると、ポーっとしていたご老人たちがすごく楽しそうに見てくれるんです。そして、何日か経った後、その施設のクワーカーの方から僕のもとへお手紙が届きました。認知症で、もう昨日何をしたかも今日何を食べたかも思い出せない、そういう状態で暮らしていたおじいさんが、「あの日見たマジックがとて楽しかった」って、何日経っても話してくれています。私たちが驚いています。僕はそれが、すごくすごく嬉しかったんです。それから、マジックでもっとたくさんの人を元気にしたい、夢をプレゼントしたいって思ったんです。

—マジックで与えられる「夢」って、どんなことなんですか？

たとえば、カンボジアの孤児院を訪ねてマジックをした時には、子どもたちに「雪っていうものを見てみたい」って言われたんです。カンボジアには雪が降らないので、見てみたかったんでしょうね。そこで僕は、紙吹雪のようなものを使って、雪が降っているようなマジックをしたんです。マジックなら、見ることができないものを見せてあげることができるとは、そういう、それを見た子どもたちは、「このお兄さんすごい！僕もそんなふうになりたい！」って言うんですよ。

—日本ではマジックを職業とする人はまだまだ少ないように感じますが、マジックだからできることってどんなことですか？

マジックには、言語も年齢の壁もありません。だれが見ても楽しめるものなんです。「あれ、どうなっているの？不思議！」って、人間がもともと持っている知的好奇心みたいなものを刺激するんでしょうね。それに、特別な道具やステージがなくても、どこでもできるマジックもたくさんある。それがマジックの強さだと思います。そんなふうの人に夢を与えることのできるマジシャンがもっと増えればいいのに、と僕自身が思うんですよ。

05

entry
number
059アジア最貧国ドラゴン桜
税所篤快さん

さいしよ・あつよし/e-Educationプロジェクト<http://eedu.jp/>代表。早稲田大学教育学部3年。19歳で大学を休学、グラミン銀行<http://www.grameen-info.org/> GGCラホ初の日本人コーディネーターに就任。仲間とGMPプログラムを創設、運営。グラミンに日本人を100名送り込む。20歳でe-Educationプロジェクトを立ち上げグラミンより独立する。

夢を通じてしたいこと

デシュで高校生たちが自分の可能性に
チャレンジできる国をつくります

http://eedu.jp/

アジアの貧困地域に教育革命を！

税所さんに会った日、顔を合わせるやいなや、彼は、「今日、もうひとり合格者が出たってバングラから連絡があったんです！」と、勢いよく話し始めた。税所さんが取り組んでいるのは、アジア最貧国と言われるバングラデシュの農村部に住む高校生の大学進学を支援する「e-Educationプロジェクト」。やる気はあるのに、質の良い教育を受けることができず将来の可能性を閉ざしてしまう高校生たちに、DVDに収録した授業を見せることで受験勉強を支援しているのです。

この2年間、大学を休学し、ほとんどをバングラデシュで過ごしたという税所さん。そして今年、税所さんのもとでDVD学習を続けてきた高校生25人がバングラデシュの最高峰であるダッカ大学の受験にチャレンジしました。そして先日、そのうちのひとりが、ダッカ大学に合格したのです。嬉しい知らせに喜ぶ税所さんのもとへこの日、さらにダッカ大学に続く名門大学への合格者が出たという知らせがあったのです。

—なぜ、世界中の多くの国の中から、バングラデシュという国を選び活動しているのですか？

バングラデシュという国には、グラミン銀行 <http://www.grameen-info.org/>

grameen-info.org/での活動を通じて出会いました。大学2年生の時に失恋をして、「一人前の男になりたい！」みたいな気持ちで、世界に出てみたいと思っていたんですが(笑)、その時に「グラミン銀行を知っていますか」という本に出会ったんです。もう、読んですぐに夜行で著者の先生に会いに行ってしまったというぐらい衝撃を受けました。そこからアクションを起こし続けて、グラミン銀行の方と働けるようになったんです。その後、仲間とGMP(Global Change Makers Program)というグラミンに日本人を100名送り込むプロジェクトを創設し、運営を始めました。しかし、そんなふうで現地での活動をするなかで、バングラの農村部の若者たちが勉強の機会を求めていることを知ったんです。

—そこから、e-Educationプロジェクトを？

そうです。農村部の多くの高校生が、「学校の授業に満足できない」「もっと勉強したい」「良い大学に行きたい」と言うんです。しかし、学校側は、「教師が足りない」と。バングラデシュでは4万人の教師が不足していると言われ、農村部の教師不足は深刻です。都会では、裕福な家庭の子たちが質の良い授業を受け、さらに高い授業料を払って予備校にまで通っているというのです。だから、経済的な理由もありますが、学力的にも農村部の大学には進めないんです。田舎者と貧乏人は良い大学に行けない、と言わなければならない。そして、それじゃあもちろん良い就職もできない。そうやって格差が遺伝していつているように見える。彼らの多くが「良い仕事に就いて、両親や兄弟の生活を支えて上げ

たい」って将来の夢を語るのに、それをかなえるのは難しいんです。僕は、日本の教育水準のなかにある格差を改善したいという目標があって教育学部で学んでいたのですが、この現実にはショックを受けました。実は僕、早稲田大学の学生ですが、高校3年の時は成績がめちゃくちゃ悪かったんです。学年でも下から数えた方がいらい。それには理由があって、中学の時のクラスがいわゆる「学級崩壊」の状況だったんです。もう、授業なんてまともに行われていない状態ですね。区外の高校に進学してから、ちゃんとした授業を受けて「ああ、授業ってこんななんだ」って思ったくらいです(笑)。でも、やっぱり中学の時にしっかり基礎を勉強していなかったから、高校の勉強にはすぐについていけなくなった。別の区から来た子の方ができるのを見て、なんだか学校ごとにはもちろん、区で比べても教育の水準に差があるように感じました。それでそこで教育格差を体験してから、日本の教育制度を改善したいと思って早稲田大学の教育学部に行きたいと思うようになったんです。

—でもその成績で、どうやって早稲田に入ったんですか？

不思議ですよね？(笑)すでに3年生で普通的手段では学力挽回が難しかった僕が出会ったのが、「東進ハイスクール」<http://www.toshin.com/index.php>の衛星授業やDVD授業だったんです。これと自分で時間を作って通い詰めれば3年分の授業を半年で受けることができる。この方法でひたすら勉強して、早稲田に合格したんです。みんなが「無理だろ」って言ってたんです

けど。それで、バングラの教師不足の状況を見た時に、思い出したんです。「あの衛星授業やe-learningの仕組みを使えば、この子たちも大学受験に挑戦できるんじゃないか」って。そうすれば彼らだって、「田舎者、貧乏人には絶対不可能」と言われているバングラの最高峰、ダッカ大学に行けるんじゃないか、そんな常識覆してやれるんじゃないかって。そこから僕らのチャレンジがスタートしたんです。

—学生さんでありながら、資金などはどのように工面したんですか？

プロジェクトを始めた時、何十枚もの計画書を作りまして。それを持って色々な方のもとへ伺ったり、資金提供のお願いをしたりしてしました。でも、大きな組織からは僕たちの希望に合った支援は頂けませんでした。そんななかで、僕の恩師が個人的に資金を提供してくださったんです。その資金をもとにして、グラミン銀行の方々に指導も頂きながら活動を始めました。

—今の授業はどんなふうに行われているんですか？

衛星授業の仕組みを作るには時間がかかるので、今はまず、DVDでの授業を行っています。僕たちや仲間が授業をしてほしい先生に協力してもらえようようお願いに行き、カメラマンを手配して撮影に行きます。そこで録画したものをDVDにして、農村に持ち帰る。それを本当にポコ小屋みたいなところですが、生徒を集めて流すんで

緒にやりましょう」と言ってくださるオーナーが現れたんです。現在は千葉県の九十九里の海の目の前の高台に3000坪という土地を購入し、ランドデザインや設計図も完成し、来年には着工を控えています。ここまで来るためにも本当に色々なことがありましたが、これからもチャレンジは続きます。私がこのホテルを通じてかなえたい夢、そしてこのホテルの詳しい仕組み、この夢をここまで持って来るために通ってきた道のりやこれからの計画を日比谷公会堂でみなさんにお伝えできたらと思っています。

鶴岡さんとお話した後、私たちの心に残ったのは、ポジティブなパワー。夢を語る彼女は本当に楽しそうで、その言葉の一つひとつは聞く人を元気にします。きっと多くの人が興味を持っている鶴岡さんがこれまで人々を動かしてきた方法やホテル開業への計画、彼女が描く夢実現の方法を12月21日、日比谷公会堂で聞けることに期待しましょう！

—それが、マクレーンさんの夢？

そうです。まずは、僕自身が夢を与えられる世界一のマジシャンになりたいというのが夢ですが、さらに、人々に夢を与える“夢マジシャン”を増やしたいと思っています。そのために、夢マジシャンを養成する学校を作ろうと思っています。先ほども言いましたが、マジシャンにはプロというのがないこともあって、正式な学校というのもないんですよ。だから学校を作りた。マジックには、本当はもちろん種も仕掛けもあります。マジシャンはそれを奇跡が起こったかのように見せたり、魔法をかけたかのように見せますが、きっと、多くの人は種も仕掛けもあることを知っていません。「不思議ね～」と言ってマジックを楽しんで下さっていますよね。僕は、そのうえで、どれだけ人を驚かせ、喜ばせ、幸せにできるかが、マジシャンが挑むべき「可能性への挑戦」だと思っています。

マクレーンさんが増やしたいという「人々に夢を与えるマジシャン」の姿とは？「夢マジシャン」が増えることで、世界はどう変わっていくのでしょうか？12月21日、日比谷公会堂でマクレーンさんが語る、未来の形に注目です。

すよ。それを続けて、今年の受験に挑みました。僕たちがやっているのは、校舎を立てて学校を作るということではなく、授業の受けられる環境を作るということ。だから、ネット上での授業の仕組みを整えれば、ネットカフェなどが学校になるんです。

—今年、合格者がでしたが、まだまだチャレンジはこれからですよ？

そうですね。来年はさらに多くの高校生に授業を受けてもらえるように、10カ所でDVD授業を始める予定ですが、生徒の人数に対してPGなどの機材が足りない状況も改善したいし、授業の撮影ももっとたくさんしたい。それに、DVDだけでなく、ネット授業や衛星授業も実現していきたい。それに、これを他の国でもやっていくとなると、ちゃんと黒字にして回しているビジネスを考えていかなければいけませんよね。学ばなければいけないことだらけですが、この世界に不可能はないと僕は思っています。アジアに教育革命を起こすために進みます！

自分自身の体験から、世界をちょっとよくするために取り組む税所さん。5年後には、同じ問題を抱えるアジアの国々へこのプロジェクトを広げていくことを計画しています。しかし、「大学に合格してもらうことが目的じゃないんです」と彼は言います。農村部の学生たちが教育の機会を得ることで世界は変わる、と。12月21日、日比谷公会堂で彼が語るこの夢を通して描くその先の「世界」とは、いったいどんなものなのでしょう？